

報告

2013 年秋の天文教育フォーラム

新時代の天文学広報戦略 ～大型プロジェクトの取り組みから～

高梨 直紘（東京大学 EMP／天プラ）

1. はじめに

2013 年度の秋の天文教育フォーラムが、9 月 10 日の 17:00 より 18:30 まで、日本天文学会秋季年会の会場である東北大学川内北キャンパスにて開催されました。今回のテーマは「新時代の天文学広報戦略～大型プロジェクトの取り組みから」で、約 100 名の参加者がいました（図 1）。座長の郡山市ふれあい科学館の安藤亨平さんよりフォーラムの趣旨について説明があった後（図 2）、天文学の広報・普及に携わる 3 名の方から話題提供をしていただき、その後、会場の参加者も含めての議論を行いました。

天文学分野に限らず、研究プロジェクトの重要性や成果を広くアピールしていくことは、国民への説明責任を果たすこととともに、天文学や科学への興味関心を深める契機として重要な意味を持ちます。プロジェクトの大型化が進む中で、その意義はますます重要性を増しています。研究機関や研究者がそれぞれの立場から広報・普及を進めていくことはもちろんですが、天文教育・普及関係者にとっても、いち早く情報を得て、内容を適切に理解し、発信していくことが求められます。

今回の天文教育フォーラムでは、大型プロジェクトにおける教育・広報普及活動の取り組みの紹介を通じて、効果的な天文学の広報戦略手法のあり方を議論し、より広く天文学の活動を国民に伝えられる契機とすることを目標としました。



図 1 会場の様子（以下撮影は山岡均氏、亀谷収氏）



図 2 座長の安藤亨平さん

2. JAXA 宇宙科学研究所における取り組み

最初に、宇宙航空研究開発機構 JAXA の阪本成一さんから、JAXA における広報・普及の取り組みについてご紹介いただきました（図 3）。宇宙教育センターでの取り組みをはじめ、JAXA ではさまざまな広報・普及活動が行われています。それらの諸活動の背景

にある考え方や、その戦略的視点について、事例をまじえながらご紹介いただきました。JAXA の活動領域は純粋科学から宇宙開発事業まで多岐にわたります。そのため、無関心層を関心層にするだけでなく、JAXA の事業に否定的な意見を持つ方の考えをどうやって変化させていくのが、他の天文分野のプロジェクトと異なる点です。理路整然と論破することは、時と場合によっては感情的なこじれを生み出す原因にもなりえます。情報をわかりやすく発信していただくだけでなく、相手の視点を意識しながら柔軟に対話していくことで、信頼や共感を育てていくことが大事であると指摘されました。そのために JAXA 宇宙科学研究所が重視しているのは、地域連携です。地域には JAXA に対して無関心な人から関心のある人まで、多様な人が住んでいます。地域からは JAXA に対してさまざまな要求がありますが、それは国民からの要求の縮図だと言えます。地域の要求に応えていくことは、国民の要求に応えていくための良い試金石になるのです。JAXA 宇宙科学研究所では、地元の相模原市と連携しながらさまざまな活動を展開しており、実際にそれは JAXA の広報・普及活動に対して大きな力となっていることを、ご紹介いただきました。



図3 阪本成一さん

3. ALMA における取り組みから

続いて国立天文台チリ観測所の平松正顕さんから、アルマ望遠鏡に関係した広報・普及の取り組みについてご紹介いただきました(図4)。アルマの広報・普及に関係する基本的な考え方は、JAXA と大きく異なることはありません。しかし、アルマがユニークなのは、国際プロジェクトである点です。関係各国・地域の広報担当者と調整をしながら、広報・普及を進めていく事が求められます。電波望遠鏡であることも、アルマの広報・普及をよりチャレンジングなものとしています。すばる望遠鏡など、一般にもなじみが深い光赤外天文学に比べて、電波天文学は身近なものとはいいがたいものです。日本から見れば地球の反対側にあたるアタカマ砂漠に立地しているという地理的な“遠さ”も合わせて、アルマ望遠鏡の広報・普及を進めていく上での困難さとなっています。さらに、まだ本格的な成果が出始める前の、まさに現在進行中のプロジェクトであることも、アルマならではの悩みです。こういった点を踏まえながら、どのように広報・普及活動をしていくのが、アルマにとっての課題となっています。

講演では、具体的な活動事例としてウェブサイトや twitter などインターネットを利用したオンラインでの広報・普及活動と、各種メディアや講演会などオフラインでの広報・普及活動をそれぞれご紹介いただきました。その中でも平松さんが強調されていたのは、人を見せることの重要性です。研究者はもちろん、アルマを支えるさまざまな人たちの顔を見せることが、アルマに対する共感を広げていく上で重要です。現地で働くスタッフが交代で広報誌のコラムを執筆したり、アルマを支える高度な技術も顔の見える技術者を通じて紹介することが大事なのです。それに加え、これまで十分にアプローチ出来ていなかった無関心層にも繋がるための方法のひとつ

として平松さんが挙げられていたのは、芸術分野とのコラボレーションです。音楽家のACIDMANによって発表された「ALMA」というアルバムはその好例ですが、コラボレーションの相手を通じて無関心層にアプローチする方法論には、さまざまな可能性がありそうなことを感じました。



図4 平松正顕さん

4. TMTにおける取り組みから

最後に、府中市郷土の森天文台／クラブTMT 代表の本間隆幸さんが登壇されました(図5)。クラブTMTは、国立天文台TMT推進室が進める次世代超大型望遠鏡建設推進のための私設応援団です。ハワイ観測所で行われた最新の天文学を学ぶワークショップに参加した科学館やプラネタリウム業界の有志によって結成されたグループで、TMT推進室と連携を取り合いながら、TMTに関する講演会やイベントの企画など、TMTの広報・普及活動への協力を行っています。クラブTMTの強みは、研究組織よりも市民の側に近い立場にあることです。科学館やプラネタリウム等、参加メンバーそれぞれが所属する組織を活かした活動を行っており、講演では、その活動の一環として作成された動画を紹介していただきました。この動画は、国立天文台の4次元宇宙デジタルプロジェクトで作成され

た動画が元にしたもので、プラネタリウム等での上映を想定して、研究者インタビューなど、プラネタリウムでの上映時に役立つと思われるオリジナルのコンテンツが追加されたものになっています。既に2万人ほどに動画は見せられているようで、このような研究組織外の団体との協力による広報・普及活動の可能性を示していただきました。



図5 本間隆幸さん



図6 質疑応答の様子

5. 質疑応答

最後に、大山真満さん(滋賀大学)の進行で、参加者も交えての議論が行われました(図6)。

最初に議論となったのは、否定的な意見を

お持ちの方や、無関心層あるいは関心層といったターゲットに対して、どのような戦略で広報・普及を行っていくべきかという点でした。阪本さんが指摘されたのは、否定派や無関心層に対しては、そもそも出会うことが難しい点です。来るのを待っているのではなく、こちらから会いに行かなくてはなりません。そのためには、JAXA での地域のお祭りやスポーツイベントの利用や、アルマでの音楽を通じた普及事例をご紹介いただきました。また、関心層に対して、より深く理解してもらうための工夫としては、クラブ TMT では研究者に説明用のパネルを作成してもらい、それを使って展示を行っている例をご紹介いただきました。

一方、メディア対応におけるリスクマネジメントも話題に上りました。メディア対応は、ひとつ誤るだけでたいへんな影響を受けることもありえます。JAXA では、矢面に立つ可能性がある研究者には、必ずメディアトレーニングを受けさせていることをご紹介いただきました。しかしながら、まだその成果は十分には浸透しておらず、アルマも含めて研究者に対するメディアトレーニングの必要性が意識されました。

フォーラムに参加していた国立天文台ハワイ観測所の林左絵子さんと藤原英明さんから、ハワイ観測所の広報・普及戦略についてもご紹介いただきました。英語による国際広報・普及は、研究機関の国際的なプレゼンスを上げていくためにはもちろん、現地で暮らす所員が地域コミュニティに馴染むためにも欠かせません。英語圏以外の研究パートナーにも配慮しながら、舵取りをする様子をご紹介いただきました。

次に挙げた、まだ施設すら完成していな

い段階での広報・普及をどのように考えていくべきか、というのも興味深い話題でした。アルマはまさに現在進行形のプロジェクトですが、本格的な成果が出る前にはなにを発信すべきであるのか。阪本さんから、地道にそのプロジェクトの意義を社会に語っていく事の大事であり、それがいざ苦しい事態になった時にも支えてくれる根強い支持層の存在につながっている例をご紹介いただきました。林さんからは、インターネットも十分に普及していなかった当時、すばる望遠鏡建設にあたって全国各地に説明に出向いた事をご紹介いただきました。

最後に、広報と教育の間のジレンマについて質問が挙がりました。組織に属する広報担当者の立場と、独立した個人である研究者の立場が相反するようなことがある時に、どうするのか。天文学分野の研究組織では、広報担当者を研究者が務めるケースが多く、この問題は天文学分野特有の問題かもしれません。そのような場合には、研究者としての意見を曲げず、人類全体に貢献する事を考えて行動すべきであるという力強い意見が出たところで、閉会となりました。

高梨 直紘